

「壕と塁」

「豊橋公園の自然」(恒川敏雄著)

昭和58年発行より (p. 47)

お城にとっては壕は生命線。埋められることは落城を意味し、大阪城ではないが城の悲劇である。

昭和15年ごろの覚えでは飽海の西、旧八幡社跡の東、美術館の東、神明社の北、西の国道辺などは消え、わずかに本丸の周辺、神武帝銅像東、元将校集会所東、その南の浅いくぼみなどはいまもなお、昔をしのぶにたる。就中、西壕は城研究者の羨望の地域である。深き草のしげみ、木のそびえ、シダ植物の密度、塁の上、壕底の道(歩いてできたもの)など、かけがえのないものだ。せめて本丸周辺は、重要な文化財として後世に。本丸の東の塁と豊城神社跡周辺は高木、亜高木が茂り、豊城の盛としての樹相は他の名城に比べて、恐らく勝るとも劣るまい。

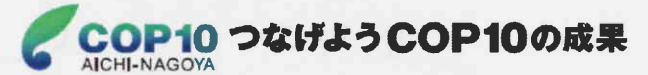
さて、過去は追わず、現状を直視して古城の品位保持に。もう一つの喜びは、豊川(入道淵)と朝倉川の天然の壕的存在である。しかも、その南側のガケには自然の植生が飽海から吉田大橋まで続き、樹下の繁みの中にはシダ植物が少なくない。

要がい堅固な地に城づくりした先人の卓見に頭が下がる。いまや、わたくしたちはその英知のおかげで、やすらぎの地をもっていることは、なんとしあわせなことか。母なる河、豊川の存在する限り、豊橋公園は安泰であろう。一木一草に至るまで愛護の手をのばしたい。わたくしが豊橋公園について、愚稿を草しはじめたのも、意はこの点にある。



文政年間ごろの境図

あいち森と緑づくり「環境活動・学習推進事業」



## 2011年 定例自然観察会

# 都市公園の自然 ～豊橋公園の30年



豊川、朝倉川は豊橋公園の天然の壕的存在

(9月7日撮影)

第4回(9月11日)  
主催:NPO法人東三河自然観察会



NPO法人

東三河自然観察会

2011. 9. 11. NPO法人 東三河自然観察会

## 2011年 定例観察会「都市公園の自然～豊橋公園の30年」第四回 参考資料

## 1. 秋草（抜粋）「豊橋公園の自然」（恒川敏雄著：昭和58年発行）（p. 24）

昭和46年9月29日午後4時頃、南正門から入園。緑の芝生の手入れおわり、マツは始まる。土手にネズミノオが長い穂を弧状にたれ、イネ科の終わりを告げている。ツルボの紫花が草むらから、夕陽を受けて講演の景色が立体的に見える。碧空に聳えるマツの王者ぶり更にあらた。本丸の西濠に降り植生を調べる。ハナタデの淋しい赤のまんまが群立する。マルバヌスビトハギは花と実。ミズヒキの花は白く、赤く、時に白赤まじり、これをゴショミズヒキという。イノコズチも群生し、かたい実。ヌスビトハギ、カラムシ、ヤブミョウガ（青藍色）なども実。草かげに虫の音、やぶ蚊来襲。スミヤグラの白壁が柔らかい光を浴びいる。エゴマ、メナモミはまだ。ヤブタバコさかり。そそり立つ石垣に雌花、雄花のイタドリ。ノブドウは白黒の実をつける。俳人、小山南史氏に逢う。満潮時に釣人あちこち。車に道をゆずる。公園内への乗り込みはおことわり。豊城神社西濠を探る。アオミズ花。白色をかざすヤブミョウガ。ヌマダイコン満開。シダ類が斜面に手をさしのべている。イワガネソウ、フモトシダ、ホシダ、イノデなど。珍しくホトトギスが蕾をつけてシダに混る。その他、前の壕に似た植生。お宮の東濠を踏む。キチジョウソウが多い。花は12月頃か、未だ見ず、今年こそ、ここで。ナキリスゲ花。ヤブラン実。濠の南が埋まる。元将校集会所あとの休憩所に登る。オカメザサ、イセメダケらしい笹に触れる。体育館西濠におりる。オニヤブソテツとシャガを見る。貸ボート屋から体育館北下までの南側の草地は野草一ぱい。オナモミ、アメリカセンダングサ、アオビユなどの帰化植物も見つかると。殉職警察官の碑の付近のエノキ林下、クロマツ林北の矢場なども野草天国であった。短く刈りとられている。野球場のスタンドに腰を下す。かつて八町練兵上を想起し今昔の感にたえず。カゼクサ、チカラシバ、ネズミノオ、シロツメクサ、オオバコ、アキノヘシバなど芝がわりの草たちが今も残り、過去を語る。草刈をやめてほしい地域は濠内土手付近、野草教室であるから。



ヤブタバコ(菸草)

頭花は煙管(きせる)の煙首に似る。  
しわのある葉はタバコの葉に似る。



キチジョウソウ(吉祥草)

花茎の高さは10cm程。

## 2. セミ (2) 「豊橋公園の自然」 (p. 40) (この項は「鈴木氏」の筆による。)

豊橋公園で見られるセミ類は、前回に書いたゴイニイゼミ、クマゼミ、アブラゼミなどに続いてミンミンゼミ、ツクツクボウシが加わった5種である。

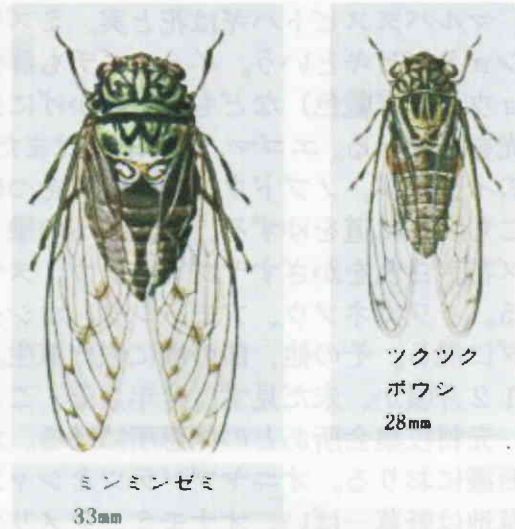
今回は後者の2種について、9月9日の観察結果について述べてみたい。8月下旬には5種類のセミが勢ぞろいする時期ではあるが、この2種は9月前半が発生のピークと思われる。

ミンミンゼミはクマゼミに次いで大型のセミである。数は決して多いとはいえないが、独特のあの甲高い音色は、相当離れた場所からも聞きとることができる。生息地はやや局地性があるが、渥美半島では生息地も少なくない。しかし豊橋市内では石巻山、普門寺など東部の山間地が主な生息地であり、市街地での生息地は無く、吉田城跡の周辺にのみ見られることは興味がある。豊橋公園のセミ類では代表格といってよいだろう。

しかし近年は、個体数が減少傾向にあることはさびしい限りである。人為的な環境にはすみにくい種のように思われる。

ツクツクボウシも前種とほぼ似た時期に姿を見せるセミだ。

8月中ごろには声を聞くようになり9月末ごろまで見られる。透明の羽根、黒いスマートな小さな体で、鳴く姿を見ることは楽ではないが、比較的低い枝などで見ることができる。



(図: 「野や庭の昆虫」 小学館より)

残暑の頃になると姿を現し秋の訪れを最も強く感じさせるセミでもある。

## 3. 鳴くムシ: 「豊橋公園の自然」 (p. 48:図も) (この項は「宗川氏」の筆による。)

豊川堤は、釣り人だけでなく、多くの市民の憩いの場である。私たちは冬、草モチにするヨモギを摘み、春、クサボケの赤い花が点々と咲くころ、ツクシ摘みをする。そして夏草が茂るようになると、ムシたちの楽園になる。ことにお盆過ぎには鳴くムシが多い。

残暑の厳しい昼さがり、この堤防の小道をいけばススキの草むらでキリギリスが鳴き競っている。日暮れともなれば、右も左もムシの声。だれもが知っているスズムシ、リーン、リーン。そっと足音をしのばせて、草をかき分けると、羽根を広げて鳴いている。スズムシに似てそれより小さいクマスズムシもいる。これはムシかごの中でリリリリーと優しい声で鳴いてくれる。みんなの知らないムシを家で飼うのは楽しいものだ。

宵の口、チンチロリンのマツムシ、リューリューと鳴くカンタン、それにエンマコオロギやミツカドコオロギ。秋のムシたちの合奏は、いよいよ佳境に入る。昼間、姿を見せなかったマツムシが葉の上にとまって鳴いているが、そうした夜のムシたちの生態をぜひ観察したいものである。お月見はダンゴを食べるだけでなく、ムシの鳴き声を楽しむ夜でもある。秋の夜のひとときを沖野の豊川堤を歩いてみませんか。三河生物同好会では昨年からは沖野での鳴くムシの観察会を行っており、ことしは9月13日だった。主な参加者は呉服町の子供会、旭町の鈴木四郎太氏。

